

山口県萩市大井方言の 比喩語・比喩句について

岡野信子

はじめに

1. 調査対象地：萩市大井は市内北部に位置し、JRの大井駅がある。昭和30年に萩市に編入されるまでは阿武郡大井村であった。現在、戸数は約900戸、人口は約3,200人である。主な生業は農業で、甘夏柑・玉葱が有名である。また日本海に面した浦（本藩領）と港（徳山藩領）は漁業地区である。
2. 調査年月日時：1992年10月21日午後1時～4時
3. 話者：^{あじこ}阿字雄愛子 大正5年5月10日生（76歳）大井本郷。阿武町福賀より嫁す。
農業。
金子常次 大正4年10月30日生（77歳）大井本郷。農業。
田中キミエ 大正2年2月24日生（79歳）大井後地。^{うしろ}阿武町^{なご}奈古より嫁す。
農業。
古谷弥一 明治39年2月9日生（86歳）大井港中。^{みなと}漁業。
4. 協力者：草野隆司 昭和31年生
清水満幸 昭和34年生
5. 調査者・調査場所：岡野信子、大井公民館
6. 調査方法・調査時の様子：調査票に基いて尋ねながら、関連する物、事についても尋ねた。また岡野がこれまでに萩市域で聞いているもの、方言集にあるものをたしかめ問う方法も加えた。調査は談笑の中に進み、終了時には、「タフシミデ ゴザイマシタ」「タ下エニ ウソワ チイデス ネー」などの感想も聞かれた。
7. 以下の記録について
(1)比喩語でないものしか得られなかった時は（ ）を施して記した。
(2)萩市南部の^{さんぽ}三見で聞いたものを記したときは〈三見〉と記している。
(3)以下に記すものは、おおむね話者4人がともに知っていた。いちいちの語に盛・稀は記していない。
(4)調査票にないものは、1、2・・・のように別番号にしている。

I. 自然現象

- 1 日照り雨 キツネノヨメイリ
- 2 入道雲 ニュードーダモ・ブンゴタロー（豊後太郎）〈三見〉豊後の方角に出る。
- 3 旋風 タツマギ（竜巻き）
- 4 霜柱 シモバシラ
- 5 つらら シマル（その形状をたとえたものらしい。LAI参照）

- 6 北斗七星 (ホク下ヒチセー)
- 7 昴 シマルボシ・スマルボシ (三見)
- 8 流れ星 (ナガレボシ)
- 1 晩春の降雪 ザンガツノ ハゲワクシ (三月の禿げ隠し—禿げ山になっている所を雪が隠している)

II. 動物

- 9 かわはぎ メーボ (「目疣」の見立て)
- 10 ひらめ オークチ (大口)・メダカ (目高)・ウシノベロ (牛の舌) ひらめにさまざまの種類があるらしい。
- 11 ひきがえる (ヒキ・ドービキ)
- 12 青大将 イエマムシ (家真虫)・ヌシ (主)
- 13 とかげ (トワダ・トワキリ (三見))
- 14 かまきり カマキリ (鎌切り) (名)
- 15 水すまし ミズスマシ (水澄まし)・スイジン (水神) (三見)
- 16 きつつき キツツキ (木つつき)
- 17 せきれい カーラスズメ (川原雀)
- 18 ふくろう (ヨズク・フルツク)
- 2 しいら (魚) (マンサクー溝作。「しいら」は「しいら (実の入ってない粉)に通じるので「溝作」と言い替えた) 比喩とは言えないが面白い命名である。
- 3 ひめじ キンタロー (金太郎) 色で。
- 4 なまこ ターラゴ (俵子) 形状で。
- 5 ほおじろ チンチロベンゲー (鳴き声の模写だという)
- 6 椋鳥 イチコギ (稲扱ぎ) 稲刈り時、ハゼ (稲干し架) にとまっている。
- 7 かけす クシヒキ (櫛引き) 鳴き声から? 「櫛引き」は「櫛を作る」こと。

III. 植物

- 19 馬鈴薯 キンガイモ (キンカー禿頭)
- 20 とうもろこし (ナンバンキビ南蛮黍・トキビ唐黍—渡来を言った命名)
- 21 いんげん豆 サンドマメ (三度豆)・バワマメ (馬鹿豆)
- 22 そら豆 オタフクマメ (お多福豆)
- 23 木くらげ ミミダブ (耳朶) 形の比喩。
- 24 げんのしょうこ ミコシグサ (御輿草) 果実が熟してはじけた時の形状の見立て。
- 25 どくだみ (ニユードーグサ入道草—その葉の汁が虫さされや疥癬の薬になるところから出た名か。「入道」は癩病を言う方言)
- 26 いたどり (イタドリ)
- 27 からすらり カラスウリ・キツネアマクラ (狐の枕) (三見)
- 28 すみれ スモトリグサ (相撲取り草) 茎をかけ合わせて遊ぶ遊び方から出た名。

- 29 春蘭 ジジババ(爺婆) 向かいあって立つ姿に寄せた名。
 30 母子草 (モチクサ餅草一餅に搗き入れる。蓬より美しい)
 31 ねむの木 ネムリギ(眠り木) 夜には葉が閉じる。
 8 あしび オバンチャ(お番茶) 葉が茶の木に似ている。
 9 えのころ草 ネコジヤラシー猫をじゃらす道具に似ている。
 10 いのこずち ヒツキモゾー着物などにくつつく。
 11 つりがねにんじん チョーチンバナ(提灯花) その形の比喩。
 12 あじさい テマル(手鞠一形状の見立て)・テマルワン

IV. 性向

- 32 熱しやすく冷めやすい人 (アキヤスノ ホレヤス)
 33 あわてん坊 (ケソケソ・キョンキョン 擬態語)
 34 動作の鈍い人 (テレーグレー 擬態語)
 35 嘘つき センミツ(千三つ)・マンミツ(万三つ)・センスラ(千のそら言)・
 エーコロハチペー
 36 ほらふき オーフロシキ(大風呂敷)
 37 おしゃべり (チャバチャバ 擬態語)
 38 冗談言い (ヒョーキンドマ劇軽玉・ヒョーキンドレ)
 39 口先だけの人 カバチガ エー・ウドンヤノカマ(「湯」と「言う」の掛けことば) (三見)
 40 とんちんかんなことを言う人 アサツテ ムイチヨル 人・ウシノシリイ チャワ
 ツツイタヨーナ コトー ユー 人(牛の尻に茶碗をついだようなことを言う人)
 41 のらりぐらり煮え切らない人 ナヌグジ(三見)
 42 怒りっぽい人 イラ・ハラタテラク(腹立て河豚)・ラク下ンペー(三見)
 43 気むらな人 キンボーイン・ジューゴンチ(十五日)
 44 泣き虫 ビリスケ(ビービー泣く子)
 45 おてんば娘 ピンピラ(坂田金平のような娘?他地にキンピラもある)
 46 腕白坊主 アラクマ(荒熊)・デンノシロー(才知もある腕白坊主)
 47 出しゃばり オサキマンザイ(お先万歳)・デベソ(出鱈)
 48 どこへでも顔を出す人 ジョーキマンジュー(蒸気汽船の形をした饅頭一今の鯛焼きのような饅頭一を売る店が、祭りの時にはかならず出た)
 49 家にこもって外出しない人 ミソオケ(味噌桶)
 50 小心者 (ヒッコミー引っ込み)
 51 内弁慶 ウチワベンケーノ ソトビジン(内輪弁慶の外美人)・コタツベンケー
 (炬燵弁慶) (三見)
 52 人づきあいをしない人、社交性のない人 デブショー(出無精)・ヘンカ(偏屈) ともにややずれた答である。

- 53 妻に対して頭の上がない男 シリアシタ (尻の下) ・ハナマル (「鼻輪を取られている」の意か) ・オ万ゼンドー (岡船頭一女房が岡から指図する)
- 54 けち ニギリ
- 55 欲張り (ヨケンドガミ)
- 13 物知り マンネンゴヨミ (万年暦)
- 14 働き者 百ボシアサボシ (夜星朝星) ・コッテウシ (牡牛) (三見)
- 15 見かけは強そうで実は弱い人 オニミソ (鬼味噌)
- 16 縁起を気にする人 ゴヘーカツギ (御幣担ぎ)
- 17 高所恐怖症 ハンドーガルイ (大きな水がめを背に負うているように、高い所に上れない人)

V. 食生活

- 56 大食漢 ハンドバラ (大きな水がめのように何でも入る腹)
- 57 ぼたもち オハギ (大井ではオハギは餅米をだんごにして餡をまぶした物、ボタモチは餅に餡をまぶした物だという)
- 58 砂糖味が薄い サトーヤノカド カッケッタ (砂糖屋の門先を駆けぬけた)
- 59 塩味が薄い バカミタイナ
- 60 大酒飲み イッシヨーマス (一升舂) ・シトタル (四斗樽) ・オロチ (大蛇) ・ノマスゴンゴ (飲まず五合)
- 61 酒に酔ってくだをまく ボラードバス (鱷の、水面から飛び出す習性への比喩か)
- 62 酒に酔って顔が赤くなる、そのさま ベンケーガオ (弁慶顔) ・(三見) ではユテダゴ・シュテンドージ (酒呑童子)
- 18 千大根 タコノテ (一方を残して切れ目を入れた干し大根の形のたとえ)
- 19 里芋がえぐい フドー ホル
- 20 食べすぎて胸がつかえている感じである ノ下ブトイ
- 21 煮魚を食べた後、その骨などにお茶を入れて吸う、その物 イシャゴロシ (健康になるので医者がいない)
- 22 盆なしでご飯や料理をさし出すこと テボソ (手盆)
- 23 一對の器の片方だけ残る ゴケニ ナッタ (後家一未亡人になった)

VI. 動作・様態

- 63 恥ずかしくて顔が赤くなる、そのさま ツラビガ モエル (面火が燃える一怒りで顔が赤くなる。恥ずかしさではない)
- 64 どしゃ降りの雨 ダ下ーノ ケンカ (座頭の喧嘩で ツヨー フル。「杖を振る」と「強う降る」の掛け詞) ・オケノソコガ ヌケタヨーナ・カンカン タダイタヨーナ
- 65 ずぶ濡れ・7分よ濡れになる マレネズミニ ナル
- 66 服装がだらしないさま ビツダレ・ピンダラレ

- 67 髭がのび放題なさま 「コヤシガ エーカラ ヨー アブ」の答のみ
- 68 厚化粧をしている人 シロギツネ (白狐) ・シツグイ (漆喰) ヌッチヨル
- 69 背丈の高い人 デンシンバシラ (電信柱) ・ノナカノ イッボンズギ (野中の一本杉)
- 70 出びたい (デブ^{びたい}出額^{びたい}の略。比喩語は得られなかった。デブカッチンとも)
- 71 汗がひたいから流れ落ちる アセガ タキアヨーニ オチル
- 72 目を丸くする メタマガ トビデル
- 73 口をとがらす ツアグチオ (角口を) トガラガス (三見)
- 74 焦げくさいにおい (コガリケサイ)
- 75 遠廻りをする マーリミチ スル
- 76 末っ子 スエナリ・カゴバライ (籠払い「これで最後」の意。聞いたことがあると話者は言う)
- 77 一生懸命頑張る (リキイッパイカー杯 これは当節の新しいことば)
- 24 ポマードなどつけて頭ばかり光らせている シンチューノ ビョークギ (真鍮の鍔釘)
- 25 野外で大便に行く キジ^{ウチニイク} (雉を撃つ時にはしゃがんで撃つところから出た比喩である)
- 26 遠くまで遊びに行く タカアルキ スル (高歩きをする)
- 27 いったん出かけた者がすぐに帰ってくる ネコモドリ (猫戻り) スル
- 28 みやげなしに他家を訪問する テブラデ イク
- 29 徒労に終わる オチャ ヒク
- 30 かなわぬ敵に挑む キチンドガ トシャクオ ケル (いなごが稻むらを蹴る)
- 31 長話しをする タエオ スエテ ハナス (台を据えて話す)
- 32 くどくてわずらわしい ミミガ スエル (耳が簷える)
- 33 一部始終を事こまかに (話す) タマゴカラ コケコーローマデ
- 34 無駄話に時を費す アブラ ウル
- 35 何の役にもたたぬことを言う ヘチマノ カワー ユー (糸瓜の皮を言う)
- 36 早合点して自分の考えを言う ハヤウタ ウタウ (早歌を歌う)
- 37 酔狂する ボラオ トバス・イッコンボラ (一喉鯨一酔狂する人)
- 38 面当てをする ハンドー マウス
- 39 子供が腹をたててすねる プリオ ツル (鱒を釣る)
- 40 もめ事を裁定をする エーファー (一二) ツケル
- 41 家計が不如意である マエガ マエン (舞が舞えん)
- 42 成功しない セゴジャー ノラン (背腰は伸びない)
- 43 成し得ない ハブシガ (歯節が) タタン
- 44 熱狂する ヒフキタマニ (火の玉に) 子ル
- 45 見当違いの方に向いている アサツテノホーオ (明後日の方を) ムイトル 知って

いて知らぬ風をするのにも言う。

- 46 ほんの少し スズヌフナミダホド (雀の涙ほど)・ササノハニ ツケテ フルホド
(笹の葉につけて振るほど)

VII 人事

- 47 土地っ子 ハエヌキ (生えぬき)
48 嫁が婚家との折り合いが悪くて逃げ帰る ホボロ フル (「ホボロ」は藁製のかご。これに手廻りの物を入れて実家に帰る姿を写しての表現である)
49 重病人が死の前に一時的に快方に向かうこと ナカビヨリ (中日和)
50 「死去了」ということ ゴロージマセニ ナッタ (死者が出た家の高年者は、弔問客の悔やみのことばに、「ゴロージマセ フー」(ねえ、あなた)と前置きをした後に、死者のことを語った。この特定の前置きのことばによって死を象徴している。

VII. 生業関係

- 51 下手な大工 カマゲダイク (カマギ (薪) にしか使えないような物を作る下手な大工) 大井では薪をカマゲ・カマギとは言わない。「カマゲダイク」ということばが伝わったのだろう。
52 重い材木の運び方 下ンボ (前には補助木を十字にしぼりつけて二人が担ぎ、後は一人で担ぐ担ぎ方)
53 無駄な出費 ミチノコヤシ (道ばたに施肥をするに似た無駄な出費)
54 商売などに失敗した オーコガ オレタ (担い棒が折れた)
55 麦刈り前の休日 ムギウラシ (麦熟らし)
56 収穫終わりの祝宴 ホコリフルイ

IX. 身体関係

- 57 体格がよい ガランガ フトイ (伽藍が大きい)
58 頭のひよめき オ下リ (踊り)
59 ひとみ ホ下テ (仏)
60 手のひら テクボ
61 ふくらはぎ ヒルマスボ (「スボ」は「藁づと」で、ふくらはぎの形のたとえ)
62 下り坂で膝ががくがくする ヒザガ ワラウ
63 横座り ナガレヒダ (流れ膝)
64 小石を踏んですべり転んだ イシグルマニ ノッタ (石車に乗った)

X. その他

- 65 袖口の狭い筒袖 テッポソデ (鉄砲袖)
66 袂の底に自然にたまったごみ タモ下グサ (伏草)
67 逆三角形の背負い籠 トリノズ (鳥の巣)

4 「暮らしのことば」の中の「比喩のことば」

(1) 造語発想上の特色

- a. 直写直叙 たとえば「せきれい」を「カーラスズメ」（川原雀）と言い、「なまこ」を「ターラゴ」（俵子）と言うたぐいがそれである。
- b. 日常卑近なものへのたとえ 「ラク」「ボラ」などの魚の形状、習性へのたとえ、また「大風呂敷」、「味噌桶」など、身近なものにたとえたものが多い。
- c. 間接性 bとは逆に、一種の忌みことば的なものもある。たとえば「死んだ」と言わずに「ゴロージマセニ ナッタ」と言うたぐいがそれである。
- d. 誇張 「嘘つき」を「センミツ」（千三つ）というたぐいも多い。
- e. ことば遊び 「ウドンヤフカマ」（湯ばかり・言うばかり）のような掛けことばのものもある。

(2) 文学作品に見られる比喩との比較

- a. 笑い 暮らしのことばの比喩では“笑い”に主眼点が置かれて、馬鈴薯を「キンカ」（禿頭）などと言う。文学作品の比喩では“美”に主眼点が置かれるであろう。
- b. 日常性 すでに造語発想上の特色としてあげたが、誰にもすぐわかってともに笑える比喩が多い。
- c. 文学的な一面も (1)の「ことば遊び」にあげた掛けことばのものは、文学的と言うこともできよう。

(3) 比喩語か非比喩語か

たとえば「ネムリギ」（ねむの木）は、夜に葉を閉じる習性を言ったものである。「眠ったように見える」のだから比喩とも考えられるが、事実そのままとも考えられる。一方、「チンチロベンケー」（頬白）は鳴き声がそのように聞こえるのだというが、「ベンケー」は「弁慶」を連想させて比喩語らしく聞こえる。比喩語と非比喩語の境界は截然としていない。

(4) 比喩語の生命

暮らしのことばの中の比喩のことばは日常に即しているだけに、その日常が変われば比喩語の意味するところもわからなくなる。たとえば祭りの時の出店にはかならず蒸気馒头屋が出ていた時代には、「ジョーキマンジュ」（どこへでも顔を出す人）の比喩語が笑いを誘う。が、「蒸気馒头屋」なるものを見かけない今日、若い人々にはこの比喩語は理解されない。比喩語の生命は日常生活のテンポと歩みを一にするようである。

（おかの のぶこ 梅光女学院大学名誉教授）